

特集

これからの日本、 澤上 篤人×渋谷 健×

Atsuto Sawakami

Ken Shibusawa

今からの長期投資 藤沢 久美

Kumi Fujisawa

取材・文/安倍 貞子 岩切 徹 (本誌編集部)
写真/和田 佳久



個人マネーを動かせば 日本経済はドーンと変わる

藤沢 いま、まさにリアルタイムな話題
といえば政権交代ですが、今回の政権交
代をどう見えていますか？
澤上 正直、期待少し、疑問たくさん
とどこかな。

というか、我々の問題は、いまだにな
んでも国にやってもらおうとしているこ
と。国は借金だらけですよ。何かやって
も、結局、国債を発行したりして、ツケ
を将来にまわすだけ。私は、お金のない
国になにかをやってもらおうとするので
はなく、世界最大の眠れる資源・個人マ
ネーを少し動かすことで社会を変えてみ
たいと思っています。

経済は、国がやっているんじゃない。
国民みんなが、飲んだり食ったりしてい
る、そういうことの集まりが経済なん
だ。よく日本はもう終わりとか、中国に
追い抜かれるとか言われるけれど、私は
まったくそう思わない。日本だって、ま
だまだ、やり方次第でいくらだって発展
できるんだよ。

たとえば、2009年6月末の預貯金
残高は791兆円。GDPの1.56倍の
お金が預貯金に眠っているなんて、こん
なばかげた国は世界でもないよ。みんな
何もせずに、0.1%の金利で、じとー
としているんだからね。ほんのちよつと

世界的金融不安の後、日本経済は疲弊し、
個人投資家のマインドもすっかり冷え込んでしまっ
ているのではないだろうか。
そんな中、コムンズ投信が
「これからの日本、いまからの長期投資」と題して、
投資家セミナーを開催した。
語り手は、さわかみ投信の澤上篤人氏、
コムンズ投信の渋谷健会長、
司会は藤沢久美氏。
長期投資を考えている個人投資家に
とっては、見逃すことのできない
3人のオピニオンリーダーが
語るこれからの日本、
そして長期投資とはどんなものなのだろうか。

でいい。1割動かしたって79兆円ですよ。
これは、90兆円の国家予算に近い額です
よ。ほんの1割動かすだけで、日本の経
済はよくなるんです。

藤沢 民主党が目指すものは、要するに
大きい政府。澤上さんがおっしゃる方向
とは、かなり違いますね。

澤上 お金をばらまくのはいいけれど、
そのお金はどこからもつてくるの？ 富
を築くものが、いきいきとお金を動かさ
ないと経済は活性化しない。経済のバイ
が大きなければ、ばらまけない。そう
いう意味では、福祉よりも、経済を大き
くすること、安定させることが優先的な
政策だと思えますよ。

渋谷 今回の政権交代は、確かに、歴史
に残るものになると思います。でも、時
代の変革を、ひとつの政党だけに、そん
なに期待しているのかというと、そうで
もないと思うんです。会場のみなさんは、
どう思われたでしょう。私は、政権は交
代したとはいえ、本のカバーが変わって
変わっても、内容まではあまり変わって
いないように感じましたね。

長期投資の成功モデルが 世の中を変えていく

藤沢 お二人は常に、「自分たち一人一
人が国のありかたをイメージして、国を
変えていかなければいけない」と、おっ

しゃっています。お二人ご自身はどん
なイメージをお持ちですか？

澤上 長期投資を通して、みなさんには
成功モデルになっていただきたい。そ
ういう人たちが増えていくことで、経
済、社会、国は変わっていくと思ってい
ます。というの、長期投資とはお金儲
けではなく、「将来こうなりたい」とか、
「子どもたちにこんな社会を残してい
たい」とか、そういう思い・願望を自分
のお金で実現していくことです。投資と
は、未来を築いていくことなんです。

藤沢 でも、みんなの思いで世の中を変
えたいと思っても、政治を見ていると、
そう簡単には変わらないと思ってしまうの
ですが……。

澤上 いま既得権がある人たちは、居心
地がいいから、変わろうとなんて絶対に
しないでしょう。でも、個人が少しずつ
先に走り始めて、その人たちがニコニ
コ幸せそうな成功モデルになっていつた
らどうでしょう。世の中とは、「なんか
良さそう」「いい感じ」という思いが充
満してきたところで、ポンと変わる。既
得権者たちが興味を示してきて、法律な
どを変え、やがて国全体が変わってくる
んです。

ここで一番の付加価値は、時間。将来
を見据えて、さつと行動する。モタモタ
しているより、さつさと成功モデルにな
ったほうがいいでしょ。

個人投資家の強みは、投資家と生活者の両面をもっていること。投資家としても、生活者としても、企業には長くがんばって欲しいですから。

藤沢 一人一人がビジョンを持って行動することが、国を変えていくということなんです。

澤上 そもそも経済は、大きなお金が流れ込む方向に発展するもの。みんなが向かっていく先に、社会はできていく。1/2割の人が動いたら、世の中は変わりますよ。お金持ちは、もうほとんど運用していますよ。大切なのは、さきに走ること。投資とは、今を語るのではなく、先をみるものだからね。ちよつとずつ動いて、それが大きくなって誰もとめられないというねりになる。いまは、その変わり目といえるのではないのでしょうか。

藤沢 波澤さんは、日本の将来にどんなイメージをお持ちですか？

波澤 私は、小学校2年から大学までアメリカの学校に通っていたので、物心ついてからずっと外から日本を見てきたわけです。で、思うのは、日本人とは、実に、もったいないな〜ということ。一人一人に会うとみなさん魅力的なのに、国や会社の中では存在が失せてしまう。30年後、日本にどうなっているかという、世界的にお役に立てる、魅力的な日本人がたくさんいる国になっているかと思えます。

人生も投資もプロセスを楽しみたい

藤沢 では、今日の本題でもありますが、長期投資とは、具体的にどんな投資方法をいうのでしょうか？

波澤 投資は、もちろん、最終的な結果を求めることも、ひとつの考え方で、長期投資で求めるべきことは「結果」ではなく、その「プロセス」なのではないかと思っています。

我々の人生だって、最終結果は「死」。人生も投資も、そのプロセスをどう楽しむかがポイントだと思います。

将来のことなんて誰にもわからないからこそ、いろんなことが楽しめる。そのためにも、「いま」始めることが大切なのではないでしょうか。

藤沢 プロセスを具体的に投資にあてはめると、どんなことがいえますか？

澤上 長期投資とは、作物を育てるようなもの。春に種を植えたら、夏は雑草を刈ったりしながら育てていき、秋に稲刈り。冬は、農機具などの手入れをしながら暖かくなるのをじっくりと待つ。そして、また春になったら種を植える。この

さわかみ投信株式会社 代表取締役
澤上 篤人 ●Aisuto Sawakami

Profile

1947年、愛知県生まれ。ジュネーブ大付属国際問題研究所国際経済学修士課程終了。1970年からスイスのキャピタル・インターナショナル社のファンド運用担当者を務めた後、80年にスイスのビクテ銀行日本代表に就任。86年にはビクテ・ジャパン株式会社代表取締役社長に。その後、1996年にさわかみ投資顧問株式会社（現・さわかみ投信株式会社）を設立。さわかみファンドは、現在、純資産額2200億円を超え、代表である同氏は日本における長期運用のパイオニアとして熱い支持を集めている。新著に「長期投資家がニヤリとする7つのメガトレンド」(角川SSC新書)がある。



そのために何が必要かという点、内側にこもっただけの教育や環境では芽生えない視点、つまり内側だけではない、外側でもない斜めから見ることでできる日本人が増えて欲しいと思っています。私は、ある意味、日本はいま、平成の鎖国化をしていると思っています。それを打破して欲しいと思っています。というのも、こうした見方は、長期投資につながっていると思っています。長期投資には、いまの時点からだけでは足りない、遠い将来から現在の自分を斜めに眺めているような、そんな視点が必要だと思っております。

でも、日本の将来についてはダライ・ラマさんが、大変に興味深いことを言っておられます。「21世紀は、日本の世紀だ」というのです。

これは、私がコモンズ投信を立ち上げるときの想いと似ているところがあります。確かに物質的なことは大切だけれど、物質性や生産性を高めるための合理性や効率性だけを追求するのは、先進国が概ね同じペースで豊かになっていった20世紀モデルだと思っています。企業の唯一の存在意義・社会的責任は、「メイクマネー」であると言われていた時代です。

ね。

ところが、3年前、ノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス氏が「多様性」を指摘するようになった。いまの世の中は、日本のような成熟社会もあれば、中国やインドのような成長社会もある。しかも、インターネットで世界はつながり、マルチな多様性をみせている。そんな中、評価されるのは、「感性」。企業が目指すべきものは、効率性・生産性がすべてではないと言っています。

これは、先のダライ・ラマさんの話ともつながりますが、21世紀は日本ならではの「もったいない」とか、「お先にどうぞ」「まあまあまあ」といった感性の部分が評価されるというんですね。企業は、機械的なメイクコンテンツから生き物みたいな柔軟なものになっていくであろうと……。

藤沢 面白いですね。80年代、ちょうど日本が元気があった頃、アメリカで研究されたファジー理論みたいですね。日本のあいまいさを理論化しようとして、盛んに取り上げられていました。また、日本のあいまいさを評価・研究しようとする流れが、復活していくのかもしれないですね。

ような壮大な繰り返しプロセスが、長期投資です。

波澤 いま日本は、どの季節ですか？
澤上 いまの日本は、季節なんて忘れてしまっている。この壮大な営みを無視してしまっているんだね。

投資にも作物にもいえるのは、人間には太刀打ちできない大きな自然のルールがあるってこと。冬にむかって種をまいてもダメだけれど、春に蒔けばちゃんと芽が出る。長期投資も投資すべき時期、待つ時期がちゃんとある。そこを忘れたら、ちゃんとした投資なんてできるはずがない。

波澤 私たちは、対話を長期投資のプロセスとしています。企業の価値をつくるのは、ファンドではなく、会社の経営者、従業員、そして企業の商品を使う生活者。私たちは、この三者が相互的に対話するコモンズランドを作りたいと思っています。一方的にモノを言ったり、聞くだけだったりするのはなく、対話をしながら次のステージにつなげていきたいんです。

ファンドについても、分配金など収益を受け取るの先に、何が収益の源になっているかを知っていただきたい。だから

ら、私たちも、投資家のみなさんと対話をしていきたいと思っています。

人間も企業も数値だけではわからない。だから対話を

藤沢 澤上さんは、育てていく。波澤さんは、対話していく。スタイルが明確ですね。従来の投資のように、企業の決算に一喜一憂したり、目に見えて儲からないと不安になったり、そういう感覚ではないのですか？

澤上 個人投資家は、裏表の関係。投資家であり、生活者なんです。

たとえば、生活者はその商品を買うことで、企業の利益に貢献する。同時に、企業からはできるだけ安く買っていいものを提供して欲しい。「あんまり利益とらんといてねー」って感じですね。

反面、投資家としては、利益を出して欲しい。この両面あることが、長期投資の強みなんです。投資家としても、生活者としても、企業には長くがんばって欲しいですからね。バランスよい継続経営を願うことは一致しています。

藤沢 なのに、私たちは日頃、生活者、投資家、会社に勤めていれば会社員とい

企業価値をつくるのは、経営者、従業員、そして企業の商品を使う生活者。この三者が対話できる「コモンズランドをつくりたい」。

コモンズ投信株式会社 会長
波澤 健 ●Ken Shibusawa

Profile

1961年、神奈川県生まれ。法沢第一の5代目の子孫。父親の転勤で小学校2年生から渡米。83年テキサス大学卒業。87年UCLA経営大学院修了、MBAを取得。財団法人日本国際交流センター、ファースト・ホストン証券会社(NY)、JPモルガン銀行(東京)、JPモルガン証券会社(東京)、ゴールドマン・サックス証券会社(東京)、大手ヘッジファンドのムーア・キャピタル・マネジメント(NY)を経て、シブサワ・アンド・カンパニー株式会社を創業し代表取締役に就任。2008年9月にコモンズ投信会長職も兼任。経済同友会幹事、法沢第一記念財団理事等も務めている。



途上国では日本にとっても注目していて、「本当に豊かになったらどうなるのか、日本が最初にお手本を見せてくれるはずだ」と言っています。

うようにその時々で立場で分断しているかもしれない。リンクして捉えていなかった。一体化して、ものを考えることが大切なんですね。

では、明確な投資スタンスの中、企業を見極めるときのポイントを教えてください。

澤上 自分が生活するなかで、10年、20年先、なくなつては困る会社に投資すればいいんじゃない。

藤沢 テクニカルは関係ない？

澤上 ぜんぜん(笑)！

澤上 何度も繰り返しになりますが、私たちもテクニカルな数値より、対話を重視しています。だって、企業だって、人間だって、数値だけで、その全体を見られるわけではないでしょ。

たとえば、身長、体重、生年月日、年収などの数値だけで、その人がわかるわけではない。数値は誰にでも通じる共通言語として大切ではあるけれど、情報をデジタル化するということは、情報をそぎおとすことでもある。それだけではわかりあえないから、対話が重要になってくるんです。

また、企業をみるときは、経営者と同じ視線で立つ努力もしています。

ら勉強するんだ、だから頑張るんだと幸せそうでした。そして、みんな日本をとつても注目していて、本当に豊かになったら、社会はどうなるのか、人間はどうなるのか、日本が最初にお手本を見せてくれるはずだと語ってくれました。

統計や数字ではなく 気持ちを放り込んで

Bさん ファンドのリスクヘッジについて、また長期投資の定義について教えてください。

澤上 投資は、成績を出そう、出そうと、リスクヘッジやベンチマークなどにこだわりすぎると難しくなる。経済は、生活実感がすべてだから。だって、不景気って一言でいうけれど、みんなお腹すいて食べたり、飲んだりする経済は常にあるでしょ。私たちファンドも、自分たちが応援する企業の株価が低くなれば買おうし、高くなりすぎたら、一部売る。次の買い場のためにキャッシュを持っておきたいからね。この繰り返し。どんなときでも経済はあるから、心配はしなくていい。だから、リスクヘッジもないし、ベンチマークもないんですよ。大事なものは、生活実感。統計とか、数字ではなく、投資に気持ちを放り込んで欲しい。



シンクタンク・ソフィアバンク 副代表

藤沢 久美 ●Kumi Fujisawa

Profile

1989年大阪市立大学卒業後、国内外の投資運用会社に勤務。96年に日本初の投資信託評価会社を創業。99年、同社を世界的格付け会社スタンダード&プアーズ社に売却。2000年にシンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画。現在、副代表。03年社会起業家フォーラム設立、副代表。05年より、法政大学ビジネススクール客員教授も兼務。様々なテレビ・ラジオ・雑誌等を通じて、600社を超える企業を取材。現在も、ネットラジオ「藤沢久美の社長Talk」等、全国の元気な企業の経営者のインタビューと現場の取材を続け、メディアを通じて発信している。



というのも、ファンドは、いつも出口を気にしてしまう。投資家の期待にこたえるため、利益と資金の効率性を一番に、より高く、より短く資金を回収しようとしてしまう。

しかし、経営者は、企業は継続するものであり、出口を意識していない。立っているポジションが違うんですね。しかし、澤上さんも我々も、ファンドでありながら、長期的な経営を期待しているから、経営者と同じ土台に立つて企業をみる事ができるんですね。

かつこよくお金を使う かつこいい大人に

藤沢 では、ここで会場の方々のお声を聞いてみましょう。

Aさん お二人の著書を読み、実際に投資して、投資手法や人生哲学などを尊敬しています。個人的にどんな人間を目指しているのかお聞かせください。澤上 まず一つ目は、本格的長期投資で経済的な自立をする。本格的長期投資なら、複利効果で面白いようにお金が増えていきますから、その仕組みに乗っかってしまえば簡単です。

二つ目は、増やしたお金を世の中のために使いたいと思っています。どうせ使うなら丁寧に大切にしたい。「使う」という行為は、経済の拡大に貢献できそうです。

そして、三つ目が、カッコいい大人になること。経済的に自立して、世の中のためにお金を使う。そんなカッコいい大人が身近にいたら、みんながそれをお手本にしようと思われたいです。こんな人間になることで、世の中がよくなっていけば本望ですね。

澤上 私は、上を向いて歩ける人間になりたいなあ。あ、その前に上を向いたら見える電線がなんとかなるといいのだけれど(笑)。

10年近く前ですが、中国人の方と話をしていたら、中国の国民13億人のすべてが、目が覚めたら明日はもっとよくなっているはずと信じて、夜寝るのだそうです。それって、すごいことですよ。日本も、目線を上に向けて歩ける気風になつて欲しいと思いましたね。

藤沢 去年、途上国8カ国をまわつてきたのですが、みんな目がキラキラしているんですよ。みんな今日より明日のほうがよくなるはずだと信じていて、だから

す。1年の人もいれば、10年、20年と捉えている人もいます。しかし、コモンズ30ファンドのように、長期の目安を30年と打ち出すと、その意義がいまいでなくなる。「30年」は、受け入れる人・そうでない人を振り分けてくれますからね。長期投資といってしまうと、なかなか線が引けないが、30年といえば、投資家の心理の整理がしやすいようです。また、30年は長いので、我々は、一世代だけでなく、次世代にも資産をつなげていきますように提唱しています。

リーマンショックで消えた 張りぼての投資家

Cさん 澤上さんは、リーマンショックを予見できましたか？

澤上 予見云々でいえば、ウチも下がっていますからできなかつたといえます。でも、慌てて逃げ惑うようなことはしていませんよ。むしろ、強気で買いまわっています。

私は、今回の金融バブルをはじめからずっとみてきました。そして、無機質な投資が増えてきて、こんなの運用じゃないと、にがにがしく思ってきました。パブルで消えたのは、張りぼての投資家たち。やっぱり、作物を育てるように投資しなくては。同じ1千億の運用でも、お金の価値を感じない1千億と、大切に育

てた1千億ではお金の重みがまったく違います。こういうとき、それがはつきりしますね。

リーマンショック後は、まともな流れがはじまろうとしていますから、長期的にはチャンス。明日、2兆円もつてきたら、みんな買ってあげますよ(笑)。

しずくから大河に。うねり となつて日本を変えよう

澤上 私の先祖である渋沢栄一が日本で初の銀行をつくつたとき、お金をしずくにたどえ、「銀行に集まつてこないしずくは、ぼたぼた垂れてしまうだけだが、銀行に集まつたしずくは、大河となり経済の原動力になる」と語りました。これは、銀行中心に間接経済で発展した日本経済をよく表していますが、大河が原動力になるということは、昔もいまも変わっていません。現代は、ファンドに少しずつを集め、直接金融で経済に刺激を与えたいと思っています。

1人だけではできないことも、澤上さんや、今日集まつてくださった方々が、しずくとなつて集まつてくだされば、必ずや大きなうねりになる。そして、みんなで日本経済を発展に導くことができました。こんな素晴らしいことはないと思つています。

今日は、ありがとうございました。